

# 他者との対話をとおして「わたし」を見つめる

## Considering Self through Dialogue with Things Around

桑山 菊夏\*<sup>1</sup>  
Kikuna Kuwayama

諏訪 正樹\*<sup>1</sup>  
Masaki Suwa

\*<sup>1</sup> 慶應義塾大学環境情報学部  
Faculty of Environment and Information Studies, Keio University

Everyone in the daily life regards interactions with others as a dialogue to know oneself. We may hear what others really think, not by listening to their words but by observing their behaviors and appearance. As we make observation of someone's behavior, we ask ourselves, "why does he/she act like that?" and consider what we think about it. When we express ourselves as we are now, the things expressed interact with the environment, and thereby we become able to create new values. Dialogues that occur between us and others will come to be included in a narrative about our personal life. We argue that the entirety of the narrative is the very potential values of oneself found.

### 1. はじめに

自己に対する認識は、日常の何気ない出来事、行為、人との出会いやかかわりなどによって常に変容する。つまり、社会やコミュニティにおける自己は、常に他者とのかかわりによって象られている。

本稿においては、他者とのかかわりによって象られるまるごとの自己のことを「わたし」と呼ぶことにする。「まるごと」とは言っても、「わたし」はそのときの「わたし」をすべて把握しているのか定かではなく、おそらく把握できないことのほうが多い。体験する他者とのかかわりが「わたし」自身に影響を与えているとしても、そのかかわりや受けた影響全てについて「わたし」自身が意識的であるわけではない。無意識のうちに他者に影響を受けていたことに、後々になって気づくことがある。それゆえ、「わたし」が認識している「わたし」だけではなく、「わたし」によって認識されない「わたし」や、言語化されていない「わたし」の体感、思考、感情や欲求なども含めてまるごとの「わたし」という捉え方をする。

「わたし」を他者によって象られているものと考えた場合、他者に目を向けることは象られた「わたし」をみることもいえる。「わたし」にかかわる他者のことを、本稿では「誰か」と呼ぶ。「誰か」は人であるとは限らない。ものや空間、環境なども含め、自分の「そばにいる」何かのことを指す。「わたし」の隣に寄り添ってくれる存在、「わたし」をあらしめてくれる存在として慕う意味を含め、「誰か」という擬人化表現を用いることにする。「そばにいる」といっても、「誰か」は必ずしも物理的に近くに存在するというわけではない。どこか遠くにいたり、過去になくなってしまっていたり、そもそも目には見えなかったり、存在すら曖昧な概念だったりするかもしれない。そして、「わたし」自身が「誰か」と「わたし」の二役以上を演じることもある。今この瞬間には確かに「わたし」だと思っていたものが、次の瞬間には「誰か」に変わることもありうる。

「誰か」と出会うたびに、「わたし」は新たな「わたし」に出会い、今この瞬間の「わたし」はこの瞬間にしか存在しない。過去を生き、今を生き、そしてこれからを生きる「わたし」が、同じように生きて/生きられた「誰か」と出会い、かかわり合う。

「誰か」とその場で向き合い、まるごとの「わたし」でかかわろうとする(=「対話する」)ことが、「わたし」のあり方を見つめるため

の糸口となる。そして、「わたし」は「わたし」についての気づきを得ることで、自らの生活を更にいきいきとしたものに彩ることができる。と考える。

この考えは、エスノグラフィーにおける、自己再帰的な立場をとる調査手法から着想を得ている。自己再帰的なエスノグラフィーでは、伝統的なエスノグラフィーのように調査者と被調査者を単に「『見る一見られる』という関係」とみなすのではなく、「調査者自身はどのような観点をもち、どのような経験をし、どのような感情を抱いたのか」を示すこと、すなわち「他者にかからめ取られた自分自身」への視点を持つことに重点を置く[北村 13]。

このような自己再帰的なエスノグラフィーの手法の一つにライフストーリー研究がある。ライフストーリーは、語り手とインタビューアの相互的なインタビューで構築される「個人が歩んできた自分の人生についての個人の語るストーリー」[桜井 02]である。ライフストーリー研究における「対話」について、小倉[小倉 12]は次のように述べる。

“自らの生(生きられた現実・経験、実存的なポジショナリティ)を背負って、つまり上述の「学知と現実が分かれていく以前の経験的土壌」に降り立って異化しあう生成的コミュニケーションが「対話」である。”(p.58)

筆者は、ここで小倉のいう「対話」を、単なる調査者としてではなく、幼少から固有の経験を重ね、現在進行形で日々生活者として生きる「わたし」が、その身体をもって場を「誰か」と共有し、「誰か」と「わたし」とのあいだのやりとりによって相対的にみえてくる「誰か」や「わたし」の姿をみつめ、それぞれが実は持っている新たな価値を見出し合うことであると解釈した。本稿では、このように「生の宿り場」としての身体を意識して生活することが自己や他者に関する気づきを得るきっかけになるのではないかという仮説のもと、日常での他者とのやりとりを「対話」として捉えて他者に対話を持ちかける工夫について述べ、この試みが自己と他者に何をもたらすのかを考察したい。

### 2. 対話を持ちかける工夫

#### 2.1 耳を傾ける

「誰か」と対話するための工夫としてまず考えられるのが、「誰か」の声に耳を傾けることである。

ここでいう「耳を傾ける」とは、「誰か」が人である場合、その「誰か」が発する言葉を聴くことというより、「誰か」の感情を文脈から想像したり言葉で表現された意味の裏にある本音を表情や声の抑揚から感じ取ったりすることである。また、その「誰か」が言葉を発していないくとも、その表情・行為・態度などを観察することによって意図を読み取ることができる。

ゴッフマン[Goffman 63]によると、人間の振る舞いの多くはある一定の意味を含み、身体表現はある種の言語としてはたらくコミュニケーションの手段である。発する言葉の持つ意味合いだけではなく、その人の在りよう全体を観察することがその人の声を聴くための助けになる。

また、「誰か」が人間ではなく、意思を持たないとされるものや空間などである場合にも、その「誰か」の声にならない声は何を「わたし」に訴えかけているのか、探ることができる。

たとえば、美術鑑賞をしているときに「この作品は、どのようなメッセージを投げかけているのだろうか」と問いながら鑑賞することは、その作品の声に耳を傾けることといえる。

「誰か」との対話は必ず「わたし」自身との対話を伴い、声にならない「誰か」の声に耳を傾けることは「わたし」の声に耳を傾けることである。

心惹かれる「誰か」に出会ったとき、その「誰か」が訴えかけてくる声に耳を傾ける。声を聴き、「誰か」の持つ魅力を認めると同時に「その魅力は自分には無い」、「持ち合わせていないから惹かれるのかもしれない」という「わたし」の声が聴こえてくる。しかし、それが「わたし」に無いのであれば、それは「わたし」にとって「必要なもの」かもしれない。そして実はわたしはそれを「まだ持っていない」だけで、それを受け入れるための場所を持っているかもしれない。

「誰か」の声に耳を傾ければ、かき消されていた「わたし」の本音が聴こえてくる。そして、抱いていた微かな違和感の正体や感覚、感情、欲求などの出どころを探し当てることができたとき、それが「わたし」にとって価値のあるものとなる。

## 2.2 吐き出す

声を聞こうとすることだけではなく話しかけることも「誰か」との対話を生む工夫のひとつである。つまり、「わたし」自身の未だ声にならない本音を吐き出すことが対話の始まりになる。

ここで「吐き出す」という表現を使うのは、誰かに意味を伝えるための整った形でなくとも、まるで言葉になりきらないもやもやとした気持ちを親しい人に吐露するように、形になるかならないかのままをまずは表現してみる、そんなイメージを伴わせるためである。この、「まずは表現してみる」ことが、実は「誰か」との対話を生むために必要であると考えられる。

諏訪ら[諏訪 15]は、新しいものごとをつくり出すプロセスとして、心の中で思い描いているものごとをまず実行し、それによって起こる環境との相互作用を観察・分析することによって次に実行することを定めること、つまり(生成)、〈インタラクション〉、〈分析〉、〈創起〉を繰り返すという「構成的ループ」を提唱する。

「わたし」の声を形にして「誰か」と接する場へとまず吐き出すこと(=〈生成〉)で、形にしたものと「わたし」や「誰か」のあいだに新たなかわりが生まれる(=〈インタラクション〉)。そのかわりに新しい意味を見出し(=〈分析〉)、今までは聴こえてこなかった「わたし」や「誰か」の声が聴こえてくる(=〈創起〉)。その繰り返しによって、新たな気づきを得ることがある。

たとえば、あるコンセプトをデザインによって表現することを考えてみよう。まずはコンセプトについて思い描くことや心にあることを、思いつくままに描いてみる。鉛筆で線を描いているときや描いた後に線どうしの関係性を目にしたとき、また他の線も含めた

描いた全体を眺めたりしているときに、全く関係していないと考えていたものごとが実は関係していることに気づき、新しいアイデアを思いつくことがある。

スケッチとして表象化することによって紙面の他の要素のあいだに位置関係が生まれ、描いたときには意図しなかった属性を発見し、その発見は新たなデザイン欲求が創造されるのを促すことが、デザイナーを被験者としたプロトコル実験によって示されている[諏訪 99]。

コンセプトから連想したものを手当たり次第になんとなく描いていたが、描いているうちにコンセプトについての考えが深まることもある。そのときその場でわたしの体感、感情や欲求は移ろいゆくものであるが、吐き出してみることで確信が持てたり、吐き出すことが新たな意味をみつけるきっかけになったりする。

また、「誰か」の声に耳を傾けると同時に、吐き出すことは「わたし」自身との対話を伴う。外に出そうとして「わたし」の本音を聴き出す過程は、「わたし」が「わたし」自身の声に耳を傾けることである。「わたし」の奥にある声を吐き出すためには「わたし」自身と対話する必要があり、「誰か」に対して吐き出しているように見えても「わたし」は「わたし」自身に何かを伝えている。

## 3. 対話を包括するものがたり

前章で述べたように、「誰か」との対話と「わたし」自身との対話は表裏一体である。「誰か」と対話することは、「わたし」自身との対話を必ず伴う。「誰か」に耳を傾けると、「わたし」は自身の奥に潜む本音を吐き出すと同時に聴く。「わたし」が何かを吐き出して「誰か」に伝えようとするとき、「わたし」は自身の声に耳を傾けて吐き出そうとし、吐き出された声をそのときその場で聴く。

「わたし」自身と対話することは、「わたし」の中から新たに生み出した「誰か」と対話することである。

下西[下西 15]は、フランシスコ・ヴァレラ(Fransisco Varela, 1946-2001)の「認知的自己 cognitive self」を「自己と環境の間で相互作用する行為によって形成される」と説明する。いわば、自らの行為によって「わたし」と「誰か」のあいだに新たな線を引き、その線によって「わたし」は形づくられている。

臨床心理学において、人を「語りを通じて構成され、対話のなかで構成され続ける存在」[高橋 08]とみなすナラティブ・セラピーという療法がある。ものがたることは「わたし」を形づくることである。見えない想いを言葉にして形にする過程やかたちになったものがたりに触れることをとおして、「かたられないもの」に気づく。また、ものがたることによって、かたられたものごとに対する意味づけが変化する。たとえば、日記を書いたときや、家族や親しい人に何気ない出来事を話したときに、その出来事を経験したときには気づかなかったことに気づいたことはないだろうか。出来事や感じたことについて日記を書いたり話したりすることは、「わたし」についてのものがたりを紡いでいるともいえる。

また、何かをものがたるときには、ものがたりの中での「わたし」を演じている。人間は他者が混沌とする社会に生き、つねに他者とのかわりを持つ。そのため「わたし」は日常の中でさまざまな役を演じている。トマセロ[Tomasello 09]によると、人間の子どもの自分自身や他者の集団への同調の度合いを測っており、この「わたしたち性」が、人間が社会規範を尊重する源となる。言い換えると、ひとは「他者と自分」という関係の中で、自らそして他者がどのような行為を必要とされ期待されているのかを決定している。自ら演じながら、他者にも役を与えているのである。どのような役柄を演じているかによってどこにどのように在るのが異なるため、「わたし」からの「誰か」の観え方や感じ方が異なる。

平野[平野 12]は、人間を「個人 individual」ではなく複数に「分けられる dividual」存在であるとする「分人」という概念を提案し、他者との相互作用が重なるほどに「分人化」は進むと述べる。つまり、「誰か」との対話を積み重ねることが「わたし」そして「誰か」のさまざまな役を描き出している。

ある役を演じているとき、その役がそれぞれ持つ「声」を行為として吐き出そうとする。その瞬間の「わたし」をできる限り余すところなく伝えるために、どのようなことばを用い、どのように身体で表現し、どのように発するのかこだわり、工夫をすることでその役を演じる。

岡原[岡原 14]は、社会におけるすべての営みの「パフォーマンス性(身体性・共同性・現場性)」を指摘する。「わたし」の振舞いは「他者」とのやりとりをする「わたし」を演じることであり、演じることは「わたし」と「誰か」をものがたることである。

世界は「わたし」と「誰か」で成り立つ舞台である。「わたし」と「誰か」の対話が、その舞台でもものがたりを構成し続ける。舞台上で繰り広げられるものがたりは、「わたし」と「誰か」のあいだで起こるさまざまな対話を文脈も含めて包み込む総体とも言える。そのものがたりが、「わたし」の身体に宿る生と言えるのではないだろうか。「わたし」にとっての「誰か」から見ると、「わたし」は「誰か」である。「わたし」にとってのものがたりと、「誰か」にとってのものがたりは別々のようだが、「誰か」のものがたりのなかにも「わたし」は「誰か」として役を与えられている。そこには「わたし」の知らない「わたし」が、「誰か」として存在している。お互いにものがたりを持つからこそ、受け入れ合おうとするのかもかもしれない。

#### 4. 「わたし」を見つめる

「誰か」との対話の積み重ねを包括したものがたりによって「わたし」が象られるとすると、本稿で述べてきた「誰か」と「わたし」のやりとりを対話として捉える試みは、何をもちたのであろうか。

この試みに筆者の考えに至るまでのものがたりを例として、このものがたりが筆者をどのように象っているのかを考察したい。

筆者は、所属している研究室で「感性が育まれるとはどういうことか」をテーマに置き、議論を行った。議論の際には、研究室のメンバーそれぞれが自身の「感性が育まれた」と思う具体的な経験をもとに、「感性が育まれる」ときにどのようなことが起こっているのかを語り合った。筆者は、自身の「感性が育まれた」と感じた経験に関して、五感・感情などが「ごちゃ混ぜの状態」[諏訪研究室 15]の自分によって経験され、明確に分けられることなく全体がかかかっているような感覚がある、と話していた。

この「ごちゃ混ぜの状態」という体感について考える中、大学の図書館でふと目に付いた本を開き、次のような言葉と出会う。

“現実というものはなにか適切な手がかり、あるいは補助線がないとよく見えてこない。つまり、補助線としての(共通感覚)を通して世界の現実をよりよく見るためにそれはある、ということになるのです。”(p.80)

[真壁 14]

ここで出会った「共通感覚」(=諸感覚の統合による総合的で全体的な感得力)[中村 00]という概念は、筆者自身の考える「ごちゃ混ぜの状態」に近く思われ、「世界の現実をよりよく見る」というのは筆者の「感性を育てている」状態とどこかつながるものがある、という予感がした。

この言葉について考えを巡らせ、自らの具体的な体験を思い返し、研究室のメンバーとの議論を重ねるうちに、筆者は感性が育まれているときに「うつつあい、しみこむ」というプロセスがあるのではないかと考え、イメージ図を描いて研究室のメンバーに

その考えを語った。図1は、そのイメージ図をさらに簡略化したものである。

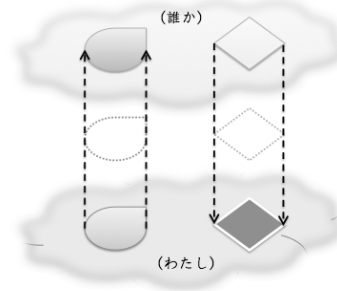


図1 「うつつあい、しみこむ」イメージ

まず、出会った「わたし」と「誰か」が「うつつあう」。影、鏡の反射のように輪郭や形を落とし合う「映す」。なぞる、まねるように「写す」。長い時間浸かったり、接していたり、何度もすりあわせたりしてるとまるで布から布に色が移るように「移す」。

こうして、「うつされ」たり、「うつし出し」たりしたかたちが「染みこむ」。影絵の形や色がだんだんと紙に染み込んでいくようなイメージである。表面的にその形や色が残りほしくないが、「染みこんだ」インクはそこにあり、変化がないようで実はうつつらとある。「誰か」から「わたし」に「うつされ」たものは、今まで出会った「誰か」から「うつされ」てきた色があるからこそそのときにしかない色が出る。そして「染みこんだ」インクは過去に「わたし」に「染みこんだ」色と混ざって「わたし」が「誰か」に「うつし出す」源となる。

このようなイメージ図を描いた後、筆者は日常のあらゆる出来事からこの「うつつあい、しみこむ」というイメージを連想し、筆者自身の『うつつあい』たい!』という願望を強く意識するようになる。そのため、「うつつあう」ためにはどうすればいいのだろうか、と自問を繰り返した。そのうちに、自分が「うつつあおう」とするとき、まず「誰か」から「うつしとる」ことを試みていると気づく。以下はそのとき感じたことを書き留めて記録したものの引用である。

“うつつし出すことをこわがって、遠巻きにうかがっている。初対面の人に話しかけられなくて、様子をうかがってるのと同じような感じ。まずは思い切って自分をうつし出せるような人になりたい。”

[桑山のノートより引用]

この「自分をうつし出そう」とする試みが、「外に吐き出す」というイメージを伴った行為に変わり、第1章で述べたように自己再帰的なエスノグラフィーの分野に触れたことがきっかけで、この「うつつあい」のイメージを「対話」という考え方と徐々に重ね合わせ、わたしの思考は本稿に至った。

筆者が研究室での議論で、自らの体感についてのイメージ図を描いたことは、「吐き出す」ことである。石塚[石塚 82]は、言語の意味性だけではものごとの本質は表しきれず、イメージ性を活用することによって本質的なものに接近すると説き、「人間の五感覚 + α の感覚」を「オノマトペや比喩の働きではっきりとしたイメージに構築」することが「イメージを育成する」ために必要であると主張する。「うつつあい、しみこむ」という比喩を用いて、言葉にならないが頭の中に浮かぶことを図として描写したことが、筆者の感覚の「まるごと」に近いものを表現したこと(=「吐き出す」)が、「うつつあい」から「対話」という新たなイメージを見出すための助けになったという実感を得ている。

前章まで「誰か」と「わたし」のかかわりを「対話」と捉える試みについて述べてきたが、この考え方が生まれた過程自体が筆者(=「わたし」)による、「わたし」そして「誰か」との対話である。「わたし」が、本で出会った言葉や概念、研究室のメンバー、そして「わたし」自身の声に耳を傾け、「わたし」をまるごとのがたることを試みた結果が本稿であるともいえる。この対話をとおして、筆者は、「自分をうつし出せる人になりたい」という自らの心の奥に潜んでいた願望に気づいた。「誰か」から何かを得ることを期待するのではなく、見返りを期待せずにはまずは与える、そんなひとになりたい。それに気づけたのは、「誰か」との対話があったからである。

「誰か」と「わたし」のやりとりを対話として捉える試みは、「わたし」が気づいていない価値あるものを見出す手助けをしてくれる。

筆者は、「わたし」そして「誰か」の在りようを見つめ、わかろうとする、包みこもうとすることによって「感性がはぐくまれる」と考える。これは「うつしあう」ことであり、「対話」である。「対話」を日々積み重ねることで、「わたし」や「誰か」の本来潜んでいる価値に「感づく」ための感性のアンテナを鋭く保つことができる。

ホルスタインらの「アクティブ・インタビュー」[Holstein 95]によると、インタビューを通して「進行中のさまざまな偶然のコミュニケーションと結びつきながら」語り手は構築される。忽滑谷ら[忽滑谷 12]や清水ら[清水 14]は、聴き手が積極的に介入し「より効果的な相互作用を仕掛ける」ことが、語り手が「身体性のあるナラティブを創出する」ための助けになると説く。

自ら意志を持って対話を生む工夫をすることが、「わたし」のものがたりをより豊かなものにする。それは結果的に、「わたし」や「誰か」をよりよい眼で見つめることにつながる。

無いように思えるところにこそ、在るのではないか。それは未だ語られず、形どられず、未だ見えないからこそ、隠されている光を見つける可能性を見出すことである。

## 5. まとめ

本稿では、日常での他者とのやりとりを対話として捉え、他者に対話を持ちかける工夫をするという試みについて説明した。また、対話の積み重ねを包括するものがたりが自己を構築し続けるという考察の上で、この試みは自己と他者のものがたりをより豊かにし、自己が本来持つ価値あるものを見出す手助けになるという考えを述べた。

## 参考文献

- [Goffman 63] Goffman, E.: *Behavior in public places : Notes on the organization of gatherings*, The Free Press, 1963. (邦訳: 丸木恵介, 本名信行訳「集まりの構造—新しい日常行動論を求めて」, 誠信書房, 1980.)
- [平野 12] 平野啓一郎: 私とは何か—「個人」から「分人」へ, 講談社, 2012.
- [Holstein 95] Holstein, J. A., Gubrium, J. F.: *The active interview*, SAGE Publications, 1995. (邦訳: 山田富秋, 兼子一, 倉石一郎, 矢原隆行訳「アクティブ・インタビュー—相互行為としての社会調査」, せりか書房, 2004.)
- [石塚 82] 石塚雄康: からだとことばのイメージ, 青雲書房, 1982.
- [北村 13] 北村文: 自己再帰性, in 藤田結子, 北村文(編) 現代エスノグラフィー: 新しいフィールドワークの理論と実践, pp.30-33, 新曜社, 2013.

- [真壁 14] 真壁智治: ザ・カワイイヴィジョン a—感覚の発想: VNC, 2014.
- [中村 00] 中村雄二郎: 共通感覚論, 岩波書店, 2000.
- [忽滑谷 12] 忽滑谷春佳, 諏訪正樹: 創造思考のナラティブを創出するインタラクティブ・インタビュー, 人工知能学会第26回全国大会, 1N2-OS-1b3, 2012.
- [小倉 12] 小倉康嗣: 学知と現実のはざまでの愚直な対話—特集にあたって—, 日本オーラル・ヒストリー研究, Vol.8, p.57-61, 2012.
- [岡原 14] 岡原正幸(編著), 小倉康嗣, 澤田唯人, 宮下阿子: 感情を生きる—パフォーマンス社会学へ, 慶應義塾大学出版会, 2014.
- [桜井 02] 桜井厚: インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方, せりか書房, 2002.
- [清水 14] 清水唯一朗, 諏訪正樹: オーラル・ヒストリメソッドの再検討: 発話シーケンスによる対話分析, *KEIO SFC Journal*, “SFC が拓く知の方法論” 特集号, Vol.14, No.1, pp.108-132, 2014.
- [下西 15] 下西風澄: 生命と意識の行為論: フランシスコ・ヴァレラのエナクティブ主義と現象学, *情報学研究*, No.89, pp83-98, 2015.
- [諏訪 99] 諏訪正樹: ビジュアルな表現と認知プロセス, *可視化情報*, Vol.19, pp.13-18, 1999.
- [諏訪 15] 諏訪正樹, 藤井晴行: 知のデザイン, 近代科学社, 2015.
- [諏訪研究室 15] 諏訪研究室一同: むま—感性開拓について本気出して考えてみた—, 慶應義塾大学諏訪正樹研究室発行, 2015.
- [高橋 08] 高橋規子: ナラティブ・セラピー: セラピーの最前線, in 森岡正芳(編) ナラティブと心理療法, pp.24-38, 金剛出版, 2008.
- [Tomasello 09] Tomasello, M.: *Why we cooperate*, The MIT Press, 2009. (邦訳: 橋瀬和秀訳「ヒトはなぜ協力するのか」, 勁草書房, 2013.)